

# ニコラス・ラヴ 『イエス・キリストの尊い生涯の鏡』： 火曜日 第十章—第十四章<sup>1)</sup>

田 口 まゆみ

Nicholas Love's *Mirror of the Blessed Life of Jesus Christ*: part 3

Mayumi TAGUCHI

## 第十章 我が主イエスのエジプト避難

前に述べましたように、我らが聖母さまが、御子<sup>みこ</sup>と、そしてヨセフと、ナザレに向かっていた時、ヘロデ王が御子イエスを殺害しようとたくらんでいることについて、まだ神から密かな指示を受けておられませんでしたので、知る由もなくおりましたところ、天使が夢でヨセフに現れ、ヘロデが御子を葬ろうと捜すので、御子と聖母さまを伴ってエジプトに逃げるよう命じました。(マタイ、2:13) ヨセフはすぐに目を覚まし、聖母さまに声を掛けて、この辛い知らせを告げたので、聖母さまは大急ぎでいとしい御子を抱き上げ、出発の用意を始めました。というのも、このお告げに大変驚いた聖母さまは、御子の庇護において怠慢であると思われたくはなかったからで、即刻、その夜のうちに、一家はエジプトに向かったのです。(マタイ、2:14) そうして偉大なる主は、僕<sup>しもべ</sup>の、いや、より正確には、悪魔の僕の追っ手を逃れ、若く幼い母と、年老いたヨセフと共に旅立ちました。道のりは困難で、辛く危険で、住む人の影もなく、遠いものでした。一般的な言い方をすれば、早駆けの飛脚で12日

平成16年6月30日 原稿受理

大阪産業大学 人間環境学部

- 1) 本稿は『イエス・キリストの尊い生涯の鏡』(*The Mirror of the Blessed Life of Jesus Christ*) 第一部「月曜日」(大阪産業大学論集人文科学編112号(95-118), 113号(201-217))に続く、「火曜日」の訳である。訳の底本としては、Michael G. Sargent, ed. *Nicholas Love's Mirror of the Blessed Life of Jesus Christ: a Critical Edition based on Cambridge University Library Additional MSS 6578 and 6686* (New York, 1992); L.F. Powell, ed. *Mirroure of the Blessed Lyf of Jesu Christ* (Oxford, 1908) を使用。マージンの注は、ラヴの原文あるいはそれに近いと考えられている、Cambridge University Library, MS Additional 6578のものである。ラブの加筆部分の始まりを [N]、終わりを [n] で示している。

から15日の道のりで、御子達にとっては、二ヶ月かそれ以上の旅でした。それは、エジプトから導き出されたイスラエルの子らが40年間暮らした、あの砂漠を通る旅であったということです。

主よ、御子<sup>みこ</sup>たちは、食事はどうされたのでしょうか。どこで休息され、どこで仮寝の宿を取られたのでしょうか。人の家などまず無い所です。さて、ここで、御子たちに心のうちで同情し、そして私たち自身の償罪のお勤めを嫌だと思ったり、辛いと思ったりしないことです。他の人、つまり、あのように尊く、立派な方たちが、わたしたちのために、それほど過酷なことに、そしてまたそのように頻繁に、耐えてくださったのですから。

また、よく注意を払うなら、この話から、多くの良い例と、重要な教えを学ぶことができます<sup>2)</sup>。

まず第一に<sup>3)</sup>、我らが主イエスが、栄え、富める時にも、逆境に苦しい時にも、それをどのようにご自身のうちに受けとめられたかよく注意を払ってみるならば、私たちも、同じように、どんな時も——栄え、安逸の時だけでなく、その逆の時にも同様に——耐え忍ぶ心を失う誘惑に駆られることがないでしょう。イエスの例を御覧なさい。まず、ご誕生に際しては、羊飼いたちに神として輝かしく示され、喜ばしくも、彼らは、御子を神として拝し、讃えました。しかしその後すぐに、御子は、一介の罪深い人として、涙のうちに、割礼を受けられたのです。また王たちが、直々に、高価な贈り物を携えて訪れ、恭しく御子を崇めましたが、御子は、そのまま家畜と共に貧しい厩暮らしをお続けになり、一介の人の子として泣いておられました。その後喜ばしく神殿に献じられ、御子こそ全能の神であるというすばらしい予言もされましたが、さて今、天使のお告げを受けて、まるで無力な貧しい人であるかのように、ヘロデから逃れてエジプトへと向かっておられるのです。

同様に、主の御生涯を通じ、繁栄と逆境が、私たちを教え導くための例として織り成されていたことを、他にも見出すことができます。主は、わたしたちが絶望によって罪に陥らないよう、希望を与える様々な慰めをお送りくださる一方、自分があさましい存在であると自覚し、いつも神を恐れて、躓くことがないように、私たちが謙遜を保つことができるよう、試練や苦しみもお送りになるのです。

上の話から学ぶことができる第二の教訓は<sup>4)</sup>、神の恩恵や神から送られる特別の慰めについて触れるもので、これを特に感じる者が、だからといって感じない者より優れていると考え、自分自身思い上がることがないように、また、反対に、そのような特別な神の贈り物・

---

2) Marginal annotation: *iii<sup>or</sup> notabilia*. (四つの注目点)

3) Marginal annotation: *primum Paciencia inter prospera & aduersa*. (第1：順境・逆境での忍耐)

4) Marginal annotation: *2<sup>m</sup> Humilitas*. (第2：従順)

慰めを受けない者が、そのために、悲しみや、神の恩恵を受ける者に対する嫉妬によって引き倒されることがないようにということを教えています。なぜなら<sup>5)</sup>、この話に見ることができるように、御子についてのお告げをするために天使が現れたのは、聖母さまではなくヨセフでしたから。しかし、聖母さまがヨセフより、はるかに恵まれ、尊くていらしたことは言うまでもありません。また、そのような神の特別な恩恵を感じることができる者は、いつも自分の思うとおり、望むとおりにならないとしても、だからといって不満に思ったり、神への感謝を忘れて沈鬱になったりしないものであるということを学ぶことができます。ですから、ヨセフは、そのように神に近く、神に受け入れられた人であったにもかかわらず、天使の顕現もお告げも、はっきりと目覚めている時にはなく、彼が眠っている間に夢という手段を使って行われたのです。

範とすべき第三の重要な点は<sup>6)</sup>、我らが主は、大切な人たちがこの世で迫害や苦難によって苦しめられることをお耐えになるという点で、ここでは、マリアさまとヨセフによく表れています。我が子を殺そうと捜している者がいると知った時、これ以上に悲しい知らせがありえたでしょうか<sup>7)</sup>。もちろん我が子が神の子であるということは重々承知していたものの<sup>8)</sup>、それでも彼らの心や思いは当然乱されて、このように言わずにはおれなかったでしょう。

「全能の父なる神よ、ここにまします尊い御子が、なぜ逃げなくてはならないのですか。まるであなたには御子を敵から守り、ここに安全にお守りすることができないかのようではありませんか。」と。

さらに、未知の遠い国に、わざわざ困難な道を通って行かねばならなかったのですから、彼らの苦難はそれだけ大きなものでした。マリアさまはまだ幼く、か弱く、ヨセフは老齢から体力も衰え、しかも二人の抱えてゆかねばならない御子は、生まれてほんの二月と、旅には不向きでしたから。それでも彼らは、こうして、貧しく、知る人もなく、寄る辺ないその土地へ向かったのです。

これらの困難は、彼らにとって大変辛いことでした。ですから、今あなたが現世で苦しんでいるなら、それを辛抱して、神の力を頼みにしてはなりません。主は、ご自身のためにも、母のためにさえも、主の特権を使おうとはなさらなかったのですから。

ここで考えられる第四の大切な点は<sup>9)</sup>、我らが主の深い慈愛と許しです。なぜならば、追っ手の敵を即時に倒してしまうこともおできになったのに、主はそれをなさらず、お優しく

---

5) Marginal annotation: nota bene. (注意)

6) Marginal annotation: 3<sup>m</sup> Tribulacio electorum. (第三：選ばれた者の試練)

7) Marginal annotation: hic. (注意)

8) Marginal annotation: hic. (注意)

9) Marginal annotation: 4<sup>m</sup> Benignitas erga inimicos. (第四：敵に対する慈愛)

寛大に、ご自分が逃亡されることを選ばれ、あの邪悪なヘロデ王の悪意と狂気に対して復讐することも当然おできになったのに、しばし甘受することを選ばれたのですから。これこそ、奥深い柔和さ、偉大な忍耐でした。同じように、私たちもするべきです。つまり私たちを不当に扱い、追っ手を掛けてくる者に躍起になって反撃したり、復讐を求めたりするのではなく、忍耐強く、しばしこれに耐え、彼らの悪意から逃げることに、さらに、神が福音書の別の箇所です。私たちの敵に対峙するように教えておられるように、特に彼らのために祈るのです（マタイ、5：44；ルカ、6：27（&6：35））。

さらに、主イエスが、母とヨセフと共に逃亡した過程について。一行がエジプトに到着され、この国に入るや否やその地の偶像が全て、かつて預言者イザヤによって予言されたとおりに倒れました（イザヤ、19：1）。

その後彼らは、この国の、エルモポリス、[N] またはリモポリス [n] と呼ばれる町に行き、そこである粗末な家を借りて、7年間貧しい宿り人、よそ者として暮らされました。

ここで、その見知らぬ土地でのご一家の暮らしぶりについて、敬虔に想像し、考えてみましょう。聖母さまは家族の暮らしのために、つまり聖母さまについて記されているように、針仕事や糸繰りの仕事で、どのように働かれたか。またヨセフは大工の技術を使って働き、尊い幼子イエスも五歳かそこらにもなれば、貧しい家の子供らしく使い走りなどのことをして、それらの仕事すべてに謙虚、謙譲、従順を示されました。そのご様子を想像してください。そのようにして手仕事によって日々の糧を得ざるを得ず、また、よそ者に対して起こりがちのように、周りの人々から往々にして非難も受けられたでしょうし、恥を忍んでのお暮らしぶりでした。寝具や衣類その他家の中で必要な物については、余分の物や手の込んだ物をお持ちであったなど考えることができるでしょうか。いいえ、完璧な清貧を愛されたのですから、間違いなく、余分な物や手の込んだ物は、たとえおできになってもお持ちになろうとはしなかったでしょう。特に手の込んだ物について言えば<sup>10)</sup>、聖母さまが、針仕事その他の仕事で、多くの人がするように華美な物をお作りになったと思われますか。とんでもありません。時間を失うことを気につけない人々がそのような手の込んだ物を作るのであって、時間を何よりも大事にされた聖母さまは、当時多くの人がしたように無為に時間を費やすことはおできにならなかったし、望まれもしなかったのです。技工のこの悪は、最も危険な悪であり、これは、様々な点から論証できます。

まず<sup>11)</sup>、神を讃えるために定められた時間を失うことになるので危険です——というのも、そのような技巧品は必要を満たすに足る簡素なものよりもはるかに多くの時間をとるから

---

10) Marginal annotation: Nota vicium Curiositatis. (好奇心の悪に注意せよ)

11) Marginal annotation: prima ratio. (第一の論拠)

です。これは大変害のあることで、神の御心<sup>みこころ</sup>に反することです。

技巧品に由来する第二の悪は<sup>12)</sup>、作者に虚栄の喜びをもたらす元となるという点です。そのような美しい物を作る時、人は、しばしばこれをみて好ましいと思い、また、作業をしていない時にも、とりわけ、神に仕え、神のみに心を向けるべき時に、そのことで頭がいっぱいになり、美しい物を作るために考えたり、話したりし、そのことで自分が技術にすぐれ、賢く、だから他の人よりも優れていると見られたいと思うからです。

また<sup>13)</sup>、その美しい物を作ってもらった人にとっての驕りの原因ともなります。なぜなら、簡素で飾りのない物は、へりくだる心と従順さをひきおこしますが、手の込んだ物は、これを所有する人の心の中の驕りの火に油を注ぐからです。

また<sup>14)</sup>、そうした技巧品を愛する人にとっては、心を神と天上のことから引き離してしまうという危険があります。聖グレゴリウスも言うように、この世でこの世なるものに喜びを見出すならば、その分だけ、天上の、神のものから引き離されるからです<sup>15)</sup>。

また<sup>16)</sup>、それは、全世界を罪に染める三つのものの一つ、つまり、おぞましい目の欲であり、そのような技巧品は、目の毒になるばかりで、そうした技巧品を好ましい思いで、虚栄の心で見れば見るほど、これを作った人も使う人も神の怒りを買うことになるのです。ですからそのような技巧品を作ることで罪を犯す機会を増やすことは忌むべきなのです。なぜなら<sup>17)</sup>、いかなる理由からでも罪を犯すことを心に許してはならず、あらゆる面で神の怒りを買わないように、避けるべきだからです。しばしば言われるように、神は清貧の範を示され、これを推奨し、愛されるのですから、間違いなく、清貧に真っ向から反すること、つまり、特に華美な技巧品には大変お怒りになるということがわかります。

また<sup>18)</sup>、その他の害に加えてこの悪が危険であるのは、虚栄に満ち、軽く、不安定な心と魂のしるしであるという点です。ですから、心を清らかに、魂を汚すことなく生きようと望む人は、そのような虚栄の技巧品を作り、また使うことを忌み、毒蛇から逃げるように、これから逃げなくてはならないのです。

しかし、ここに述べた、技巧品に対する戒めから、美しい物や立派な衣服を作ることを一切禁止していると考えてはなりません。なぜなら、それも程合いをわきまえる限り、つまり、

---

12) Marginal annotation: 2<sup>a</sup> racio. (第二の論拠)

13) Marginal annotation: 3<sup>a</sup>. (第三)

14) Marginal annotation: 4<sup>a</sup>. (第四)

15) Gregory, *Homilia in Evangelia XXX, PL 76.1221.*

16) Marginal annotation: 5<sup>a</sup>. (第五)

17) Marginal annotation: 6<sup>a</sup>. (第六)

18) Marginal annotation: vij<sup>a</sup> racio & vij<sup>m</sup> malum. (第七の論拠と第七の悪)

神に仕えるための物や仕事においては、許されるからです<sup>19)</sup>。その場合、最低限の身だしなみという良い程合いが、度を越して、悪い技巧の華美に走らないように、虚栄の喜びや偽りの愛情、この世の虚飾をおぞましくも好むといった、なべての墮落した気持ちを警戒し、避けなければなりません。ここでは、この件についての話は、これくらいで十分でしょう。

## 第十一章 主イエス、エジプトから帰還される

ヘロデ王が死に、我らが主イエスがエジプトに住まれて七年が過ぎた時、主の天使が夢でヨセフに現れ、御子を殺そうと追っていた者たちが死んだので、御子とその母を連れてイスラエルの地に入ると命じました。ヨセフはすぐに起き上がり、天使が命じたとおり、御子とその母を伴って、イスラエルの地へと帰って行きました。しかしそこで、ヘロデの王子、アルケラオがユダヤと呼ばれるその地域を支配していると聞き、恐れて、ユダヤには行くことができませんでした。すると再び夢で天使に命じられたので、ガリラヤの、ナザレという町に行きました。(マタイ、2：19-23)

「N」イエスのご帰還には、行かれた時について述べたように、安らぎ、安逸と、恐れ、困難が縋い交ざっているのを見ることができます。異国の地で敵の死を聞いた時、そして母国に帰るように告げられた時、間違いなく、大いに安堵され、安らぎを期待されたでしょう。しかし、道中の辛い旅路、また平安を期待してご帰国されてから聞かれた、新しい敵についての知らせ、また、彼を恐れて、その国を避けるように告げられたことを思い合わせるなら、そこには不安と苦しみがありました。そしてすべて、言われているとおり、私たちの教えのためになされたのです。[n]

主なるイエスよ、美しい幼子ではいらっしゃいますが、主は天と地の主人、王であられます。なんという困難、なんという苦難を私たちのために耐えられたことか、しかもいかに早くそれを始められたことか。<sup>まこと</sup>真に、かの預言者は、あなたに代わってうまく言ったものです。「わたしは貧しく、若い時から様々に苦しんできました」と。(詩篇 87：16)<sup>20)</sup>

お優しき主よ、あなたはどのようにしてその長く辛い道のり、つまり、恐ろしい砂漠を抜け、紅海を越え、またヨルダンの川を渡る道のりを、そのように年端も行かない時に歩いて、あるいは抱かれて旅されたのでしょうか。このご帰還の道は、主にとっても、同伴のご両親にとっても、往路より辛く困難であったように思われます。なぜなら往路では、大変お小さかったのを抱きかかえてゆくのも簡単でしたが、もう七歳の年に成長され、身体も大きくなられて、やすやすと抱かれて行くわけにもゆかず、そうかといって、幼い身では多くの道のり

19) Marginal annotation: Nota de honestate. (礼節についての注)

20) Marginal annotation: Pauper sum ego &C. (Biblical text)

に行くこともできず、馬に乗ることに慣れていたからなかつたでしょうから。真に、このご苦労は、今語ることができる分だけでも人類の全き救済に十分足るものであったと思えます。

さらにその行程について触れるなら、砂漠の道も終わりに近づいた時、ご一行は、洗礼者<sup>バプテスマ</sup>ヨハネに会われました。その頃ヨハネは<sup>21)</sup>、苦行に値するような罪は何も犯していなかったものの、砂漠で苦行の暮らしを始めていたのです。ヨハネが洗礼<sup>バプテスマ</sup>を行った、ヨルダンのその地域は、イスラエルの子らがエジプトを出てその砂漠に来た時に足をぬらさずにその川を渡ったのと同じ場所で、その近くの砂漠にヨハネは償罪のための苦行の暮らしをしていたと言われています。ですから、主イエスとその母がそこでヨハネに会い、再会を心から喜び歓喜した可能性はあります。それも不思議ないこと。生まれた時から、優れて、尊い子供でしたから。ヨハネは最初の隠遁者であり、それが、新しい神の掟に基づく修道生活の始まりでした。ヨハネは清らかな童貞で、キリスト以降の最も偉大な説教師でした。彼は預言者であり、預言者以上の者であり、尊く輝かしい殉教者でした。[N]ですから、敬虔に彼を賛美し、讃えつつ、ここで彼には別れを告げて、我らが主イエスとその母と共に先程来の道を進むことにしましょう。[n]

ヨルダン川を越えると、主のご一行はさらに従姉エリザベトさまの家までやってきました。そこで、特別の歓待を受け、共に盛大な快い宴を催しました。またそこで、ヨセフは、前にも述べましたように天使のお告げを受け、アルケラオが父ヘロデの後を継いでユダヤと呼ばれる国を統治していることを知らされたので、御子とその母を連れて、ナザレと呼ばれるガリラヤの町に行き、そこで、故郷でのように、共に、簡素で貧しい、しかしながら、慈愛に満ちた心豊かな暮らしをお続けになりました。

御覧なさい。このようにして御子イエスはエジプトから帰ってこられました。そこで、聖母さまの姉妹たち、その他親類、友人たちが彼らを訪い、彼らの帰郷を歓迎して、[N]自分たちのなけなしの家財から、御子たちに必要なものを贈り物として届けました。[n]

また、中でもとりわけ、福音伝道者<sup>エバングェリスト</sup>ヨハネが<sup>22)</sup>、その母、聖母さまの妹に連れられて、イエスに会いに来たことを心に留めておきましょう。この時ヨハネは、五歳前後でした。というのも、彼についての記述によれば、我らが主の受難以後67年の後に九十八歳でなくなっていますから、キリストの受難の時には、三十一歳で、キリストご自身が三十三歳かもう少し上でしたから、ご帰国の際にイエスが七歳であれば、ヨハネは五歳であったということになるのです。そして、後に、選ばれた使徒たち、弟子たちの中でも特に我らが主イエスに愛さ

---

21) Marginal annotation: De Johanne baptista. (洗礼者ヨハネ)

22) Marginal annotation: De Johanne euangelista. (福音伝道者ヨハネ)

れたことを思えば、この時、子供ながらも、彼はイエスにとって誰よりいとおしく特別の喜びであったであろうと想像できます。

この時からイエス十二歳のお年まで、福音書はイエスの子供時代について一切触れていません。しかしながらそこに一つの井戸があって、子供時代のイエスがそこから度々母のために水を汲んだという書き伝えがあります。というのも、主は柔和であったので、母のために、そのように卑しい仕事さえも拒否はなさらなかったのです。また聖母さまも、召使をお持ちにならず、従順、清貧のお暮らしぶりは、わたしたちが見習う模範になるべきものでした。アーメン。

## 第十二章 御子イエスが一人エルサレムに残された時のこと

御子イエスが十二歳の折、母とヨセフはエルサレムの町に祝祭のためにお出かけになりました。その祭りは、決まりに従って八日間続き、御子も幼いながら、彼らと共に前にも述べた長い道を旅されました。父なる神と子なる神の間には至上の愛が在るので当然ですが、その祝祭で、天にまします父なる神を崇め奉るためでした。

しかし、子なる神は、多くの様々な罪が行われ、父なる神が尊ばれていないのをご覧になり、絢爛、荘厳なその祝祭を喜んでは見せましたが、内心、深く悲しみ、哀れられました。とはいえイエスは、その祝祭の時が終わるまで、両親と共に貧しい人々の一人として従順に掟に従い、耐えられました。しかし両親が家路についた後、密かにエルサレムに留められたのです。

さてここで、ここに語られることを実際にその場で見ているように心を傾けましょう。これは大変敬虔なことがらで、わたしたちにとって有益なことです。

前に述べましたように、主がお住まいであったナザレの町は、エルサレムから74マイルばかりのところにありました。たまたま聖母さまとヨセフは別々の道を通って帰路についたのですが、夕刻、夜の宿りとして定めていた場所で二人が合流すると、てっきりヨセフと一緒にいったと思っていた御子がいません。聖母さまは、御子はどこかと尋ねました。すると、ヨセフは、知らない、マリアさまが連れて行ったと思ったと申します。マリアさまは、ワットばかりに泣き崩れ、嘆き悲しんで言われました。

「ああ、わたしのいい子はどこにいますでしょう。わたしには御子をしっかりお守りすることができなかった。」

そうして、夕暮れの中、すぐさま、できるかぎりの尊厳を保ちながら、家から家へと尋ねて回り始めました。

「わたしの息子を見ませんでしたか。わたしの息子を見ませんでしたか。」



御子のことを思い、悲しみと心配から、ほとんどご自分が倒れてしまいそうでした。年若い、尊いヨセフも、ずっと泣きながら彼女に従います。捜しても捜しても見つかりません。その夜お二人が、とりわけ、御子を心から慈しんでおられた聖母さまが、いったい休息することがおできになったのかどうか、想像に難くありません。<sup>まこと</sup>真に、友人たちがどれだけ慰めようとも、一切慰めを得ることができなかったのは不思議のないこと。イエスを失うのは、少なからぬ損失でしたから。

ですからここで、御子を思って悲しんでいらっしゃる聖母さまに、心からご同情申し上げることができましょう。お生まれになってから、それほどの大きな悲しみを体験されたことはありませんでした。

またここで<sup>23)</sup>、わたしたちに辛い試練や悲しみが降りかかった時も、そのことで過度に打ち沈んだり心をかき乱されてはならないということを学ぶことができます。なぜなら神は、この場合のように、ご自分の生母さえ例外とはなされなかったからです。神は、概して、神がお選びになった人に辛苦をもたらされますから、試練は神の愛の証であり、試練を受けることはわたしたちにとって、いろいろな理由から益になることなのです。

さて聖母さまは、御子が見つからないので、先に述べたように悲しみにくれ、その夜は部屋に閉じこもって、そのような場合に最上の救いである祈りを捧げ、このように言われました。

「全能なる、天にまします父なる神よ<sup>24)</sup>、慈悲と哀れみに満ちたお方。<sup>みこころ</sup>御心によって、<sup>おん</sup>御自らのいとしい御子を私に下さいました。しかし父よ、ご覧下さい。今わたしは御子を失いました。どこにいらっしゃるのかわたしにはわかりませんが、全てをご覧になる神でいらっしゃいます。どうぞ、わたしのいとし子がどこにいるのかお教えてください。そして御子をわたしにお返しください。父なる神よ、わたしの怠慢ではなく、心の悲しみに御心に向けて下さい。このことでは、わたしに過失があったことは重々承知しております。でも、無知ゆえに犯したことに他なりません。善き神よ、どうぞわたしに御子をお返しください。あの子なしでは生きていくことができません。そして、わたしのいとし子イエスよ、どこにおられるのですか。どうしていらっしゃるのですか。どこで休んでおられるのですか。主よ、あなたは天の父のもとへ戻ってしまわれたのですか。あなたが<sup>まこと</sup>真の神であり、神の御子であることはよくわかっておりますから。でも、それではなぜあらかじめわたしにおっしゃってくださらなかったのですか。あなたが、わたしからお生まれになった<sup>まこと</sup>真の人であることもわかっています。ですからこれまで、あなたをお守りし、あなたを殺そうとするヘロデの陰謀から逃れ

23) Marginal annotation: nota de tribulacionibus electorum (選ばれた者の試練についての注)

24) Marginal annotation: Oracio marie pro filio. (マリアの息子のための祈り)

てエジプトまでお連れしました。また今誰か邪惡な者が、あなたを見つけたのでしょうか。あなたの父なる天の全能の神が、あなたを守り、あらゆる危険と悪からあなたの盾となってお守りくださいますように。いとしい息子よ、あなたのもとへ行けるように、どこにいるのか教えてください。さもなくばあなたがわたしのもとへ来てください。今回の怠慢をお許してください。[N] もう二度とこのようなことは起こらないとお約束します。[n] どうしてこのようなことが起こったのかわたしにはわかりません。が、あなたにはおわかりでしょう。わたしの望み、わたしの命、わたしの善なるものの全て、あなたなしでは生きていけません。』

このように、わたしたちが敬虔に想像できるような言葉で、聖母さまは一晩中心を砕き、いとし子のために祈りました。

さて、翌朝早く、マリアさまとヨセフは、エルサレムに通じる他の別々の道を通って御子を探しました。そしてさらに友人や親類の中を一生懸命捜しましたが、御子の消息を聞くことはできませんでした。母は、あまりの悲しみからどうしても慰めを得ることができませんでした。しかし、三日後、エルサレムに入り神殿で御子を探すと、なんと御子が学者たちの真ん中に座り、真剣に彼らの話を聞き、賢しげに質問などしているではありませんか。これを見た聖母さまは、即座に死から蘇ったかというほどに喜び、跪いて、喜び泣きながら心の中で神に感謝を捧げました。また御子イエスも、母を見ると歩み寄ってこられたので、母は喜びのあまりに言葉もなく御子を両腕に抱きしめて、幾度も口付けをすると胸に抱き、しばらくじっと優しく抱きしめていらっしゃいましたが、心が落ち着くとこのように御子に言われました。

「息子よ、なぜこんなことをしてくれたのです。御覧なさい。お父さんもわたしも心配してこの三日間ずっと捜していたのです。」

すると、イエスは言われました。

「どうしてわたしを捜したのですか。わたしが自分の父を賛美するためのこうしたことに関わるのが当たり前だということを知らなかったのですか。」

しかしこの時両親にはイエスの言葉の意味がわかりませんでした。(ルカ 2:41-50) そこで母は言いました。

「息子よ、わたしたちと家に帰りましょう。」

すると御子は従順に答えて言われました。

「おっしゃるように、お心に適うようにします。」

そうして御子は両親に従い、ナザレの町へと彼らと共に帰ったのです。

イエスについての以上の次第から、御子はその三日の間に何をされ、どこにどうして過ごされたと考えることができるでしょうか<sup>25)</sup>。思うに、御子は、貧しい人々のための宿に行か

れ、謙虚に宿を請い、貧しい子供として、貧しい人々と寝食を共にされたのではないでしょう。[N]一部の博士たちは、御子はその三日間物乞いをされたと言っています。しかし、それは重要なことではありません。わたしたちは、ただ、御子の完璧な従順、そしてその他の美德を見習うことを考えましょう。うわべだけ物乞いをしても内に従順な心がなければ、完璧に至るためには、ほとんど価値がないからです。[n]

さらに、以上の話から、わたしたちにとって重要な三つのことを心に留め、学ぶことができます<sup>26)</sup>。

まず第一に<sup>27)</sup>、完璧に神にお仕えしようと望む者は、俗世の友や血縁者と共に暮らすべきではなく、彼らから離れ去らなければならないということです。その証拠に、幼子イエスは、父なる神のための霊的な勤めに専心したいと思われた時、自らの大切な母のもとを去られました。またその時、友や親類の中を捜してもイエスを見つけることはできませんでした。

第二の点は<sup>28)</sup>、霊的な生活を送る人は、たとえ時には魂が枯渇し、神から見捨てられたかのように敬虔の気持ちを失おうとも、あまり心を悩ましたり、心を乱しすぎたりしないという点です。なぜなら、申し上げましたように、このような状態が、聖母さまにも降りかかったからです。ですから、そのような時にも絶望に陥ることなく、懸命に、清い瞑想と善い行い、特に敬虔な祈りによってイエスを捜されるように。そうすれば、時が満ちた時、きっとイエスを見出すでしょう。

第三は<sup>29)</sup>、自らの頭や心に無碍に従うなかれということです。我らが主イエスも、父なる神を讃えるための事柄に従事しなければならないとおっしゃったその後で、そのご自分のお気持ちは抑えて、両親の意思に従い、彼らと共に神殿を出てナザレのご自宅へと、彼らに従われたからです。[N]これは、宗門に入った者にとって特に重要です。自分の目上の人には、心から服従して従うことです。[n]

さらにまた、ここに、我らが主イエスから従順の偉大な手本を得ることができます。このことについては、次の章でさらに明確に扱うことに致しましょう。アーメン。

### 第十三章 我らが主イエスがどのような生活をされたか、また十二歳から三十歳の初めまでの間に何をされたかについて

---

25) Marginal annotation: de triduo. (三日間のことについて)

26) Marginal annotation: tria notabilia. (三つの注意点)

27) Marginal annotation: primum. (第一)

38) Marginal annotation: Secundum notabile. (第二の注目点)

29) Marginal annotation: Tercium. (第三)

我らが主イエスが両親と共にナザレの家へ帰られた時、前にも書きましたように十二歳でいらっしやいましたが、それから三十歳になられるまで主が何をなさったか、どのようにお暮らしになったか、正統の聖書には何も記述を見出すことができず、それは、不思議なことに思われます。では、その間のご様子についてどのように考えればよいでしょうか。記述し、語るに値するようなことを何もなさらず、働かれず、無為に過ごされたでしょうか。神よ禁じたまえ。他方、もし主が何かなさり、働かれたなら、なぜそれは主の他の仕業のように書き残されていないのでしょうか。<sup>まこと</sup>真に不可思議極まりなく思われます。とはいえ、ここで、よく考えてみるならば、何もしないということにおいて、偉大な、すばらしいことをされたということがわかるはずです。なぜなら、主のなさったこと、主の生涯の中で、神秘や教示のないものはないのであり、お言葉や御業<sup>みわざ</sup>により徳を施される時もあれば、静かに何もされず、休息し、身を引かれることによって徳を示されることもあったのです。ですから、至上の師であり、徳を説き、永遠の命への正しい道を示すために到来された方は、お若い時から不思議に満ちた御業を、しかも不思議な、未知の、つまり、それまで聞いたこともない仕方<sup>30)</sup>で始められました。その間、人々の目には無為で、知恵もなく、取るに足りないと思わせかけということでした。これは、聖書や博士たちの教えによってはっきりと証明することができないあれやこれやのことで確認するのではなく<sup>30)</sup>、この書の初めて述べたように、教えを受け、信心の心を引き起こすために敬虔に想像を働かすことによつてのみわかるでしょう。そうして<sup>31)</sup>我らが主イエスがその時、人との交わり、交友から身を引き、教会堂に行くようにユダヤ教の礼拝堂を度々訪れて、そこで多くの時間を祈りに費やされたこと、それも最も高位の、尊い場所でされたのではなく、最も低い、密やかな場所で祈られたこと、そして、家に帰られれば、母を助け、また多分、父ということになっていたヨセフの大工仕事を助け、人々の間を、[N] 見知らぬ人のように [n] 行き来されたご様子を想像することができます。

周囲の一般の人々で主を知っている人々はみな、そのように美しく見目良い若者が誉められたり、自分の名を高めたりするようなことを何もせずにいるのを見て、大いに不思議に思いました。つまり、福音書に書いてあるように、主が幼い十二歳の折には、「イエスは成長され、知恵が増し、神と人ともに愛された」(ルカ、2:52)、つまり人の目にはそう映り、そう思われたからです。しかし今、更に成長され三十歳になられて、<sup>そとみ</sup>外見には何も誉められるような行いを示されず、人は主を蔑み、知恵の足りない怠惰な者、馬鹿者だと取っていました。ですから価値がなく卑しいと世間に見られることが、我々の救済のための主の御心だったのです。預言者が主に代わって言っています。

---

30) Marginal annotation: nota bene pro sano intellectu. (正しい理解のためによく注意せよ)

31) Marginal annotation: Occupatio Jesu. (イエスの所行)

「わたしは虫けら、とても人とはいえない。人間の屑、民の恥」(詩篇 21:7)<sup>32)</sup>

しかしここで、何もしないという無気力によって賞賛に値する徳高い行為をされたということがわかります。それは何でしょう。真に、他の人の目に、汚い屑と見せかけることは、ご自分にとっては全く必要のなかったことですが、わたしたちに必要だったのです。なぜなら<sup>33)</sup>、思うに、真に、わたしたちの全ての行いにおいてこれほど全うすることがすばらしく、また難しいことはないからです。ですから、見せかけではなく、全霊で心から望んで、肉体の傲慢な煽りを克服し、この世での名声を望まず、完全に蔑まれ、汚い、価値のない屑で通したいと切望する人こそ、最高の、最も困難な段階の完成に至るのであると思えるのです。なぜなら<sup>34)</sup>これこそ秀でて強力で、ソロモンがその証であるように、町々、国々の征服者となるよりもはるかにすばらしく讃えられるべきことだからです。

ですからこの段階の完成に至るまで、わたしたちは完成に程遠く、わたしたちのすることは語るに足りないことであると考えるべきです。なぜならば、主御自身が示されるように、しなければならぬことをしただけでは、全く、ただの取るに足りない僕に他ならないからです。(ルカ、17:10) この段階の恥辱、完璧な自己否定にいたるまでは、真実にしっかりと根ざしたとは言えず、むしろ虚栄に根を張っているのだということは、使徒が次のような言葉ではっきりと示しているとおりです。

「実際には何者でもないのに、自分をひとかどの者だと思ふ人がいるなら、その人は自分自身を欺いています。」(ガラテヤ、6:3)<sup>35)</sup>

前に述べましたように、我らが主イエスはこのように過ごされ、世間に対してご自分は取るに足りない、つまらない者として示されました。それは、ご自分に必要だったからではなく、わたしたちに完成への真の道を教えるためでした。ですからこの話に学ばないならば、弁明の余地はありません。なぜなら虫けら、そして虫けらの餌に過ぎない者が、思い上がって自分を立派な者だと思い、ひとかどの者のように増長するようになるのはおぞましいことだからです。いと高き偉大なる主が、それほどまでに身を貶めてへりくだり、取るに足りない者として通されました。うわべを繕われたのではなく、<sup>まこと</sup>真に柔和で謙遜なお心をお持ちでしたので、おできになったことでした。ですから、振りをするともなく、あらゆる従順さとへりくだりで人々の前に身を低められ、まず行いによって、そして後にはお言葉によって、弟子たちに、彼に倣い、柔和で謙遜な心を持つようにお命じになったのです。(マタイ、

---

32) Marginal annotation: Ego sum vermis & non homo &c. (Biblical text)

33) Marginal annotation: nota summam perfectionem. (最高の完成)

34) Marginal annotation: Melior est paciens viro forti. (強い者の忍耐はより良い)

35) Marginal annotation: Qui se existimat aliquid esse &c. (Biblical text)

11:29)<sup>36)</sup>そして、そこまで身を低め、へりくだられたので、人々に教えを説き始められ、福音書にあるようにいと高き神性について語り始め、奇跡や不思議を行うようになられてからも、ユダヤ人たちは、主を意に介さず、軽蔑して蔑み、「何者だというのだ。大工のヨセフの息子ではないか。」(マタイ、13:55)とか、[N]「あの男は悪霊の力で悪霊を追い出している。」[n]とか言いましたが、主は、そういった色々な嫌がらせや、非難に、黙って、柔和に甘んじられ、そうすることによって、柔和の剣で、傲慢な敵、地獄の悪魔を倒されたのです。この柔和の剣で、預言者の言葉どおり、主が、いかに強力に身を守られるかを見ようと思うなら、主の行いの全てによく注意を払いましょう。ここまで述べてきた全ての話を憶えている人には、主の行いの全てには、常に偉大な柔和さがあることがわかるでしょう。またこの後の話にも、主の過酷な死の時まで、ますますこの柔和さが示され、さらに、復活された後に、そして被昇天の際に示されました。また最後の審判の折には、世界の偉大なる王、審判者として座しながらも、主の創造物、主の同胞に、このような言葉で至上の柔和さをお示しになるでしょう。

「わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである。」(マタイ、25:40)

それでは主はなぜ柔和の徳をそこまでお示しになり、また一番の徳として愛されたのだと考えることができるでしょうか。真に、主はあらゆる罪の始まりが驕りであるように、全ての善と救済の礎は柔和・従順であること、そしてその礎がなければ、他の全ての徳の館には土台がないのだとご存知だったからです<sup>37)</sup>。ですから、もし、貞節、清貧、その他のどんな徳あるいは行いでも、柔和・従順に欠けているのに信じるなら欺かれるでしょう。そして主は、この柔和・従順の徳をどのようにすれば身に付けることができるのかわたしたちに教え示してくださった、つまり、ご自分でも、また他の人の目にも、人としてのご自分を軽蔑し、蔑むことによって、またへりくだった、卑しい行為を弛みなく行われることによって導きお示しくださいました。ですからわたしたちも、その高い徳に完全に到達したいと願うのであれば、この方法を愛し、実践しなければなりません。聖ベルナルドゥスが繰り返し言っています<sup>38)</sup>。

「神よ、言われているとおり、その柔和・従順の徳を手に入れることができるように恩寵をお与えください。」

---

36) Marginal annotation: Discite a me quia mitis sum &c. (Biblical text)

37) Cf. Gregory, *Homiliarum in Evangelia*, 7.4, 31.6 PL 76:1102-03, 1277-78.

38) Marginal annotation: Bernardus in epistola ad canonicum regularem, & super cantica sermone 34.

[N] <sup>まこと</sup>真に、これを書いているこのわたしも、自分がその徳からはるか程遠いことを知っています。この至上の徳についての話は、ここではこれくらいで十分でしょう。[n]

むしろ、わたしたちの第一の主題である、我らが主イエスの尊いご生涯の鏡へと話を戻し、聖家族の貧しく質素なお暮らしぶりを眺めてみましょう<sup>39)</sup>。老人ヨセフが大工の技術を使ってできる仕事をし、聖母さまもまた、糸巻き棒と針で働き、生計を立て、その他想像がつくような様々な家内の切り盛りをされました。また我らが主イエスが必要に応じて従順に両親を助け、食卓を組み立てたり、床を整えたり、その他の雑用を喜んで、自ら捜して、へりくだって行い、そうしてご自身が福音書で言っておられる行いを全うされました。

「人の子が、仕えられるためではなく仕えるために来た。」(マタイ、20:28)

また、ご家族三人が、小さな食卓を囲んで毎日一緒に食事をされているご様子を想像してみることができます。贅沢なご馳走ではなく、体力を維持するに足りるだけの質素で堅実な食事です。そして食後には、また、多分食事の最中にも、ご一緒にどのような会話をされたか想像してみましょう。空虚な言葉や放埒な言葉ではなく、知恵と聖霊に満ちた教えの言葉を語り、腹が満たされるとともに、それ以上に心が満たされたのです。そのようにして共にくつろいだ後には、それぞれご自分の場所に祈りのために下がられました。というのも、想像に難くないように、大きな家ではなく小さな家にお住まいでしたから、就寝と、特に祈りを捧げるために、小部屋が三つあるような具合に三つの仕切りを作っておられたのです。ですから我らが主イエスが毎夜祈りの後、慎ましやかに柔和に床につかれるご様子を想像することができます。そのことで、また他の、人にとって必要なことをされることで、主が<sup>まこと</sup>真の人であることを示し、悪魔の目から神のお姿を隠されたのです。

ああ、主イエスよ、よくぞ隠された神と名づけられました。一夜のお働きで全世界の救済も十分おできになったというのに、わたしたちのために、この永い年月の間労苦に甘んじられ、その最も汚れなき御体を償罪の苦しみに供されました<sup>40)</sup>。主の偉大な人間愛が、人のために償罪の偉業をさせしめたのです。王の中の王、終わりなき全能の神よ、あなたは全ての困っている人を助け、あらゆる状況に応じて、あなたの全ての持ち物を人々にたっぷりとお与えになります。御自身はそのような貧困、蔑み、苦行を、起きている時も寝ている時も、断食の時も食される時も、その他あらゆる行いにおいて、かくも長い年月の間、わたしたちに対する愛ゆえに、追い求め、身に負われました。

主なる神よ、愛欲、逸楽、肉体の安楽をそれほど愛し、高価で手の込んだ様々な装飾品、

---

39) Marginal aannotation: Nota modum viuendi domini Jesu cum parentibus. (主イエスの両親との暮らし)

40) Marginal annotation: Nota exemplum penitencie in domino Jesu. (主イエスの償罪の手本)

この世の虚飾の品々を求めた人々は今どこにいるのでしょうか<sup>41)</sup>。真に、そのようなものを愛し望む限り、わたしたちには、この師の学び舎で教えを学ぶことができません。なぜなら主は、言葉と行いによって、柔和、清貧、償罪の苦行、身体の戒めを教えてくださいましたからです。わたしたちは、主に知恵で勝るわけがないのですから、過ちを犯したくなければ、この至上の師、主についてまいりましょう<sup>42)</sup>。主は、騙すことも騙されることもありません。また、主の使徒の教えに従い、このように食事や衣服を保てば、報われるでしょう。必要に十分な適量を守り、過剰を避けなさい。さらに、前に述べたような、その他全ての、我らが主イエスの徳高い生活と行いを、力の及ぶ限り、真似びましょう。[N] そうして償罪の、この忌まわしい生の後に、恩寵の、永遠の喜びの生へと至りますように。[n] アーメン。

#### 第十四章 主イエスの洗礼とそれまでの過程について

二十九歳までのお年を、前述のように償罪の苦行と蔑みのうちに過ごされた後、三十歳のお年の初めに、我らが主イエスは、このように母に言われました。

「いとしい母よ、父の栄光を讃え、人々に知らせめ、また私自身を世に現すために、そして人の魂の救済を行うために行かなければなりません。それは父の定めで、そのために父はわたしをこの世に送ったのです。安心してください。すぐに帰ってきますから。」

そう言う、至上の柔和の師は、母の足元に跪き、慎ましく母の祝福を請いました。母もまた跪いて、いとおしげに両腕にイエスを抱きしめ、泣きながらこのように言われました。「尊い息子よ、望むようにお行きなさい。父と母の祝福を与えます。きっと私のことを思い出して、すぐに帰ってきてください。」

そこで主は、恭しく母に、また仮の父であるヨセフに暇を請い、ナザレからエルサレムへと向かい、ヨルダンの川辺までやってこられました。そこでは、当時ヨハネが人々に洗礼を施していました。そこはエルサレムから18マイルのところでした。全世界の主が、裸足で独りその長い道のりを行かれます。まだ弟子を集めておられなかったからでした。

ですから、この旅について、しっかりと心の中で主に同情し、このように敬虔に心の中で思い、主に語り掛けなさい<sup>43)</sup>。

「ああ、主イエスよ、王の中の王でいらっしゃるあなたが、このようにお独りでどちらへ行かれるのですか。善き主よ、あなたの公爵、伯爵、騎士や男爵は、馬に馬具、馬車や荷馬、そして召使たちは、どこにいるのですか。——王や諸侯のように、あなたを一般の人と区別

---

41) Marginal annotation: Nota contra carnales & mundiales. (肉欲と俗界に負けてはならない)

42) Marginal annotation: hic. (注)

43) Marginal annotation: Meditacio deuota & notabilis. (敬虔で崇高な黙想)



するためにあなたの周りにいるべきです。ご一行の先に行くべきラッパの数々、その他の楽隊は、お宿の係り、食事の係りはどこですか。その他、わたしたち忌まわしい虫けらの栄誉と虚飾はどこに。あなたは天と地を喜びと祝福で満たす、いと高き主でいらっしゃるのではないのですか。それではなぜそのようにただお独りで、敷物もなく大地の上を行かれるのですか。<sup>まこと</sup>真に、それは、この時ご自分の王国にいらっしゃらなかったから、そしてそれはこの世ではないからでした。なぜならこの世では、あなたは身を貶めて、王ではなく召使のように振舞われることでわたしたちの一人になられ、わたしたちの父祖がそうであったように、異国の宿り人となり、わたしたちを王とするために僕となられたからです<sup>44)</sup>。また、わたしたちが間違いなくあなたの王国にたどり着けるように、そこへの真の道筋を自ら示すためにいらっしゃいました。それではなぜわたしたちはその道を離れ、捨てるのでしょうか<sup>45)</sup>。わたしたちはなぜあなたについていけないのでしょうか。なぜわたしたちは、身を低め、柔和、従順にならないのでしょうか。なぜわたしたちは、そのように懸命に、この世の栄誉、虚栄、虚飾を愛し、保持し、切望するのでしょうか。真に、わたしたちの王国がこの世であり、わたしたちが異国の宿り人であると知らないからで、それゆえにわたしたちは、これらの全ての愚考、過ちに陥るのであり、それゆえにわたしたち、取るに足りない人の子は、終日、善い真実の物の代わりに価値のない、偽りの物を、そして天上の永遠のものの代わりにひと時の、常に移ろうものを愛し、所持するのです。<sup>まこと</sup>真に、善き主よ、もしわたしたちが、真剣にあなたの王国に行きたいと望み、わたしたちの慰めが天上のものにあり、同時に、心のうちで考えて、わたしたちがこの世では宿り人であり、異国の者であると知るならば、すぐさま、軽やかにあなたの後を追うべきでしょう。そして全てのこの世の物、現世の物のうち、生きるために必要な物のみを携え、あなたの後を追走するのに遅れることなく、荷も無く軽やかに進み、そうしたこの世の富、財貨を完璧に蔑み、無価値なものとみなすべきでしょう。

ここで我々が主イエスの<sup>バプテスマ</sup>洗礼についてさらに語りましょう。主がヨルダン川に来られた時、主は、そこでヨハネが、罪人たち、そして彼の説教を聞くためにそこに来ていた多くの人々に洗礼を授けているところを見出しました。人々はその時彼をキリストだと思っていたのです。そしてその時、我々が主イエスが、他の人々に混じってヨハネに近づき、他の人と一緒に主を洗礼してくれるようヨハネに頼まれました。ヨハネは主を見て、聖霊により主だとわかったので、恐れて、主を敬い、こう言いました。

「主よ、わたしこそ、あなたから洗礼を受けるべきなのに、あなたが、わたしのところへ来

---

44) Marginal annotation: Aduena & peregrinus ego sum sicut omnes (Ps. 38:13). (Biblical text)

45) Marginal annotation: Nota contra huius mundi dilectores. (現世の執着に負けてはならない)

られたのですか。」

すると、主はお答えになりました。

「今は止めないでほしい。正しいことを全て行うのは、我々にふさわしいことです。」(マタイ, 3:14-15)

言い換えればこうなるでしょう。

「今は言わないでほしい。わたしの素性を漏らし、明かさないでほしい。その時はまだわたしに訪れていないから。今はわたしの言うことに従い、わたしに洗礼を施しなさい。今は、従順の時、だからわたしは全ての従順を全うする。」

これについて、註解書は従順には三つの段階があると記しています<sup>46)</sup>。

第一の段階は、目上の者に従いへりくだること、そして身分が同等の者より好まれたり、高められたりしないこと。

第二に、身分が同等の者に対しても従い、目下の者より高められたり、好まれたりしないこと。

第三の、従順の至上の段階は、目下の者、つまり身分が自分より下の者に対してへりくだること。そしてこの時、この段階の従順を、我々が主イエスは、ヨハネに対して従順にへりくだることで守られ、従順の完成を全うされたのでした。

そしてヨハネは我々が主の、最もふさわしいことを行うという御心<sup>みこころ</sup>を知り、言われたとおりに、そこで主に洗礼を施しました。

さてここでよく考えて見ましょう。御高き至上の主が、どのようにして裸になられたか、一人の取るに足りない男として、衣服を脱ぎ去り、そしてどのようにヨルダンの冷たい水の中に、それも冬の寒い季節に入られたかを。すべてわたしたちへの愛のため、わたしたちの癒しのためです。洗礼の秘蹟を命じ、そうしてご自分には無い罪を洗い流されたのではなく、わたしたちの汚れ、わたしたちの罪を洗われました。そうしてそこで靈的に正教会全体、また特に信仰正しい霊との婚姻を結ばれたのです。なぜならわたしたちは、洗礼の秘蹟を受けることで我々が主イエスキリストに婚姻で結ばれるからです。ですからこれは偉大な祝祭、大変に益ある卓越した御業<sup>みわざ</sup>なのです。なぜなら、この尊き行いにおいて聖なる三位が明々白々と特殊な方法で示されているからです。神の霊が鳩のように主の上に下って来て降り立った時、父なる神の声が聞こえました。

「これはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」(マタイ, 3:16-17; マルコ, 1:10-11; ルカ, 3:22) と、そして、だから「主の言葉を聴け」と。

---

46) Marginal annotation: Nota tres gradus humilitatis. (従順の三段階)

この点について、聖ベルナルドゥスは次のように言っています<sup>47)</sup>。

「見よ、主イエスよ、今こそ語る時、故に、今こそ語り始められよ。いつまで沈黙を守られるおつもりですか。あなたはたいそう長く潜んでおられました。ええ、十分長い間。しかし、もうお話ください。父の許しが出たのです。あなたは神の力、父なる神の知恵。いつまで弱く、知恵の無い者として人の間に隠れておられるおつもりですか。あなたは尊い天の王。いつまで大工の、つまりヨセフの息子と呼ばれ、思われ、扱われることに甘んじておられるおつもりですか。(というのも、ルカが福音書で証言しているように、三十歳のお年まで主はヨセフの子であると思われ、扱われておられたからです。(ルカ、3：23))

ああ、キリストの力である柔和よ、あなたはいかにわたしの空しい驕りを打ちのめすことか。わたしの教える能力はほんのわずか、いえ、より真実を語るなら、能力があるかのように思っているに過ぎないのですが、それでも愚かにもまた恥知らずにも言葉を抑えることができず、進み出て、賢い者であるかのように振る舞い、いとも簡単に教えを説き、気軽に語り、しかし、聞く力においては全く鈍重です。一方キリストは、そのように長い間平和を保ち、人に知られぬよう隠れておられた時に、虚栄の喜びを恐れたでしょうか。実は父なる神の喜びであるのに、虚栄の喜びを恐れる必要があったでしょうか。にもかかわらず、主は、ご自分のためにではなくわたしたちのために、これを恐れられました。主は、わたしたちにはその虚栄の喜びを恐れる必要があると、よくご存知だったのです。そしてそのことを言葉で語られるのではなく、行いによってわたしたちに教え説かれたのです。さらに後には言葉でも教えたことを、この時模範を示して語られたのです。つまり「わたしは柔和で謙遜な者だから、わたしに学びなさい」(マタイ、11：29)と。というのも幼い頃から三十歳のこの時までの我らが主のご様子について、ほとんど聞いたことも読んだこともありませんが、いまや主はお隠れになることはできなくなりました。それほどはっきりと父なる神によって示されたのですから。」

以上が聖ベルナルドゥスの言葉であり、これまで述べてきたことを次章につないで、わたしたちに思い上がりを逃れ、完璧な従順を保つことを教えるために、我らが主イエスがこの時まで、いかに従順・柔和に平和を保たれたかを確認しています。主は、その徳を、この洗礼の時に、それまでにもまして発展した形でお示しになりました。つまりヨハネを立派で偉大な者と立てて、御自身は価値の無い卑賤の者とする至上のへりくだりにより、はっきりと主の僕にお示しになったのです。また、別の観点からも、主の柔和さがこの時より大きくなっていることを見ることができます。なぜならこの時まで、言われているとおり、主は、無

---

47) "In Epiphania Domini Sermo I," *PL* 183, cols. 146-47.

為の取るに足りない者として過ごしてこられました。今ははっきりと罪人としてご自身を示されたからです。ヨハネは罪深い人々に悔い改めを説き、洗礼を施していたのですから。そして我らが主イエスは那些人々に混じって歩み寄り、彼らの目の前で彼らの一人として洗礼を受けたのです。自ら教えを説き、ご自身が神の子であることを明らかにしようとしておられた時に、これは至上の柔和の極致と言えます。なぜなら人の判断力を思えば、そのために、後に教えを説く時に人の信望を損ない、罪深い取るに足りない者として軽蔑されることがないように、そのようにへりくだった行為を恐れてもよかったからです。しかし、だからこそ柔和の師である主は、あらゆる方法のへりくだりによってご自分を低められることをおやめにならず、わたしたちに教え、範を示すために、真のご自分とは異なる、蔑まれる卑しい者であるように振舞われたのです。

ところがわたしたちはそれとは正反対のやりかたで、わたしたちが尊敬され誉められる者ではないことを示します<sup>48)</sup>。なぜなら、もし何かわたしたちに誉めるに値する徳があれば、わたしたちは喜んでそれをひけらかし人に知らせますが、欠点、過ちは覆い隠すからです。しかもわたしたちの真の姿は邪悪で罪深いのです。またもしわたしたちが、自分でも取るに足らない、罪深い者だと知っている場合でも、他の人にはそう扱われたくないと思うものです。そしてその点においてわたしたちの柔和さは、ここに、そして以前に示されたようなイエスの完璧な柔和さから遠く及びもつかないのです。そして主は全ての行いを通して、柔和こそわたしたちにとって最も必要な徳であることを示されました。ですから、この徳を愛し、懸命に、全ての行いにおいて第一に柔和を保ち、そのことで他の人のためになることがますますできなくなると恐れないことです。なぜなら、僕の手で洗礼を受けると言う至上の柔和さを示されたこの時に、主は、父なる神の顕現、聖霊の証により、真の神の子であると示されたのです。ですから<sup>49)</sup>、自分の中で思っているだけでなく他の人の目にも自分を取るに足りない、卑しい者であるように振舞っても、もしそれで他の人の益になることができるなら、時がくれば、神は、私たち自身の報いと他の人々の益に最も有効な形で、わたしたちを知らしめて下さるでしょう。アーメン。

ここに第二部、火曜日のため観想を終えます。

---

48) Marginal annotation: Nota contra superbiam. (傲慢に注意せよ)

49) Marginal annotation: Nota. (注意)

はしがき：ニコラス・ラヴ：『イエス・キリストの尊い生涯の鏡』について

『イエス・キリストの尊い生涯の鏡』(*The Mirror of the Blessed Life of Jesus Christ*, 以下『鏡』)は<sup>50)</sup>、偽ボナヴェントゥラ(カウリブスのヨハネ)<sup>51)</sup>による『キリストの生涯についての黙想』(*Meditationes Vitae Christi*, 以下『黙想』)<sup>52)</sup>をニコラス・ラヴが英語に直したものである。原作の『黙想』は、全ヨーロッパに広く流布したので、そのラテン語原典写本は無数といってもよく、各現地語にも翻訳されている<sup>53)</sup>。英語でも、部分訳、あるいはコ

---

50) Editions: Michael G. Sargent, ed. *Nicholas Love's Mirror of the Blessed Life of Jesus Christ: A Critical Edition Based on Cambridge University Library Additional MSS 6578 and 6686* (New York, 1992) ; L.F.Powell, ed., *Mirroure of the Blessed Lyf of Jesu Christ* (Oxford, 1908); translation: 田口まゆみ 「ニコラス・ラヴの『イエスキリストの尊い生涯の鏡』: 序文, 月曜日」大阪産業大学論集 人文科学編112-113 (2004), 95-118, 201-217。本稿中の『鏡』からの引用は、同拙訳から、論集の巻と頁を示した上で、Sargent 版原文及びその頁を付記する。; studies: esp. Elizabeth Salter, *Nicholas Love's 'Myrrour of the Blessed Lyf of Jesu Christ'*, *Analecta Cartusiana* 10 (Salzburg, 1974) ; for numerous other studies by Salter, see Shoichi Oguro, Richard Beadle, and Michael Sargent, eds., *Nicholas Love at Waseda: Proceedings of the International Conference 20-22 July 1995*, (Cambridge, 1997), ix-x.

51) フランシスコ会士ボナヴェントゥラ(d.1274)がキリストの生涯を黙想することを重視したことから、本作品もボナヴェントゥラの作と長く考えられていた。今では、同じくフランシスコ会修道士で少し時代を下る、カウリブスのヨハネ(Johannes de Caulibus)の作品であるという意見が主流である。

52) 黙想のために書かれた作品は数あるが、『黙想』はその中でも特に代表的な作品であり、福音書にあるキリストの生涯の記述に従い配列され、教典外のエピソードも含まれている。大きく分けて3種の基本ヴァージョンがあり、一番長いものは前書きと約95章、短いものは約40章、またもうひとつは最後の晩餐以降を扱った受難部分のみのヴァージョンである。Edition: A.C. Peltier, ed., *Meditationes Vitae Christi, S. Bonaventurae Opera Omnia*, vol.XII (Paris, 1868), 509-630.

53) Sargent, 'Introduction', in, S. Oguro, et al, *Proceedings*, xix 参照。

54) 1) Middle English *Meditationes de Passione, Privy of the Passion* を含む7種の Passion section の翻訳(内1種は、韻文); 聖母の生涯を扱った部分訳(Yorkshire Writers, I, 158-61), 2) *The Life of the Virgin Mary and of the Christ*, 3) *Speculum Devotorum* (conflation with *Historia scholastica*, Nicholas of Lyra's Biblical gloss, the Revelations of St. Bridget, St. Elizabeth and St. Catherine, *Horologium Sapientiae* and *Meditationes* perhaps through *Love's Mirroure*), 4) *Fruyte of Redemption* by Simon of London Wall, 5) *The Passion of Christ* by Walter Kennedy, 5) a number of other independent translations of the Last Supper and Passion sections. See Salter, *Myrrour*, 102-18; Sargent, *Mirroure*, xxv-xxix.

ンピレーションの中に織り込まれたものが多数あるが<sup>54)</sup>、なかでもニコラス・ラヴの『鏡』は、広く、長く愛され、現在でも約50本(断片もあわせると60本あまり)の写本が残っている<sup>55)</sup>。

中世の写本が50～60本も現在まで保存され、所在が確認されているという事実は、非常に稀有なことであることにまず注意を喚起したい。これだけでも、『鏡』がいかに大きな大衆性を獲得したかを示しているが、中世末期英国で最も広く読まれた宗教文献であるということでは諸学者の意見が一致している<sup>56)</sup>。以下、『鏡』誕生の経緯と、『鏡』が強く奨励する‘devout imagination’による「黙想」(meditation)について概観しておこう。

『鏡』の作者ニコラス・ラヴは、初めアウグスティノ修道会に属していたが、後に戒律の厳しいことで有名なカルトジオ会士となり、15世紀初めにヨークシャーのマウント・グレイス小修道院長を務めている。当時、ウィクリフ派反教会勢力が台頭し、教会に脅威を与えていたが、1408年、カンタベリ大司教トマス・アランデルが、ウィクリフ派の主張のひとつである聖書主義を弾圧するために、聖書のいかなる部分も英語に訳してはならない、また、すべての信者のための読み物は大司教の認可を受けなければならないとする条項を含むオックスフォードの教令を出した。これを受けて、ラヴは、福音書に代わる信徒の手引きとして『黙想』を選び、高い教育を受けていない一般信徒のために英語に直し、同時に、原典の大胆な部分削除と加筆を行った上で、アランデルに直々に献上した。

『鏡』は、検閲を経た後、1410年頃、福音書に匹敵するキリストの書、熱心な信者の読み物、

---

55) そのうちの一本 (NE3691) を1986年に早稲田大学が取得した。(早稲田写本については、S. Oguro, *The Friday Chapter in the Waseda MS of Nicholas Love's 'Myrrour of the Blessed Lyf of Jesu Christ'* (Tokyo, 1998), esp. 11-13参照)。大方の『鏡』の写本がそうであるように美装で、彩飾のボーダーワークが施されている(早稲田版、及びその他の『黙想』の写本装飾については、Kathleen L. Scott, 'The Illustration and Decoration of Manuscripts of Nicholas Love's *Mirror of the Blessed Life of Jesus Christ*', in Oguro et al, *Proceedings*, 61-86参照)。これに端を発し、1995年7月、早稲田大学において、同大学主催により、「ニコラス・ラヴ学会」が三日間にわたり開催された。英米から、計10名(内1名は、残念ながら病欠であったが)にも及ぶ著名な中世英語・英文学研究者が一時に日本で結集するというのは前代未聞のことでもあり、猛暑の最中にもかかわらず、日本全国から多くの出席者を集め、大会は大成功を収めた。当時、日本の中世英語・英文学研究者の間では、ニコラス・ラヴという名前も、その作品『鏡』も極めて認知度が低かったので、この重要な人と作品を広く世に知らしめたという点においても、本大会は大きな意味を持っていた。(本大会については、Shoichi Oguro, et al, *Proceedings*; Paul Snowden, ed, *A Report: The Nicholas Love Conference at Waseda, 20-22 July, 1995* (Tokyo, 1996) 参照)。

56) 参考文献例：Carol M. Meale, “‘oft sipis grete deuotion I bought what I mist do pleyssyng to god’: The Early Ownership and Readership of Love’s *Mirror*, with Special Reference to its Female Audience”, in Oguro et al, *Proceedings*, 19-20 and note 1.

信仰の支え、教化の手段として公式の認可を受けた。その後『鏡』は瞬く間に巷に広まり、「純朴な者たち」、「教養のない人々」、「純朴で敬虔な魂」のためにという序文の言葉<sup>57)</sup>とは裏腹に、聖職者、隠修士、王侯貴族から市井の信徒まで、写本を注文・購入する余裕のあるほとんど全ての層に行き渡り<sup>58)</sup>、また、個人で所有することのできない者には読み聞かせられ、あるいは、他の表現手段（文学・美術・演劇など）を介して影響を及ぼした。15世紀初めといえば、まもなく英国にも印刷技術がもたらされたから、短期間に非常に多くの写本が作成されたことになる。

『鏡』は、印刷技術導入以降も、文句なく当時のベストセラーであったといえる。キャクストンは、1486年に『鏡』を初めて印刷しているが、その後、ラテン語に訳されたものが1490年に印刷されている他、ピンソンが1495年に、ウィンキン・ド・ウォードが1517年と1523年の二度にわたって印刷刊行している。宗教改革までに少なくとも9回の刊行を重ね、17世紀に入ってから、国教忌避の出版社によって出版が続けられた。その後も、改訳版などをあわせると19世紀の末まで継続的に印刷機に掛かっていたことになる<sup>59)</sup>。

福音書に匹敵するキリストの書と書いたが、この『鏡』にも、また原作『黙想』にも、聖書からの引用はごくわずかであり、もっぱら信仰を高めるための読み物であることを強調しておきたい。当時は、高位の聖職者・学者の間にさえ、ヘブライ語聖書原典、ギリシャ語訳はおろか、ラテン語訳も完全な形で行き渡っていなかった。例えば、ペトロス・コメスタによるウルガタ聖書の注釈書、*Historia scholastica* は、一部の聖句に、聖書外典や伝承説話、また、哲学的、自然科学的、また語学的な議論などを加えたものであるが、13世紀初めから三世紀以上に渡り、ウルガタ聖書、ペトロス・ロンバルドゥス(c.1095-1160)の『命題集』(*Libri IV Sententiarum*)と並び神学生の必読書だったので、各現地語に翻訳されただけでなく、多くの他の著作に有形無形の影響を与え、聖職者のみならず、幅広い層の人々に親しまれた。聖書の翻訳が公に禁止されていなかったフランスでは、13世紀に聖書の現地語訳がほぼ完成していたが、むしろ、この仏語訳と *Historia scholastica* の仏語訳とのコンフレーションである *Bible historique* (13C 末) が、ポピュラリティを得た。富裕な層をターゲットにして製作された、豪華本 *Bible pauperum*, *Bible moralisée* (共に13C) も聖句の引用は少なく、挿画と説明的文章中心のものである。大多数の信徒にとって聖書は様々に書き換えられた物語的な形で伝えられていたのである。

---

57) 田口, 112:96, 100: 'symple creatures', 'hem pat bene of symple vndirstondyng', 'symple & deuoute soules' (Sargent, 10, 13)

58) Meal, 'The Early Ownership', 19-46, esp. 20.

59) Sargent, *Mirror*, xiii-xiv.

また、ウィクリフ派の反教会勢力に対抗する目的で書かれた作品であることも忘れてはならない。聖書の現地語訳、及び教会外からの信徒教育は、ローマカトリック教会批判と表裏一体であったから、教会は、教会が「真」と信じる聖書解釈を護ることに躍起となり、批判分子は異端として厳しく弾圧するようになった。『鏡』には、当然、核心的教義に関わる部分について反ウィクリフ派的対抗手段が講じられていてしかるべきだ。「日曜日」の章に続く「秘蹟について」が、そうであることは言うまでもないが、他にも例えば、「主イエスが[中略] 聖職者たちを通してお命じになることに従い、教区司祭に従いなさい。彼らは聖教会におけるあなたの君主です。善であり正しく生きている者だけではなく、邪悪で正しく生きている者であってもです」<sup>60)</sup> といったラヴの挿入がある<sup>61)</sup>。これも、上記の事情を考慮するなら、『鏡』が当時の英国の、キリスト教社会の現実問題を如実に反映しているのだと頷ける。

次に、『鏡』の構成と ‘devout imagination’、そして「黙想」(contemplation) について見てみよう。『鏡』が、『黙想』の部分的な翻訳に加筆したものであることはすでに述べた。その構成は、基本的に『黙想』に忠実で、前書きと週の各曜日、つまり月曜日から日曜日の七部および加筆された第八部「秘蹟について」で構成されている。それぞれの曜日は、キリストの生涯の出来事に沿って分けられ、福音書と預言書の記述を引きながら、聖書外典の啓示の書や伝承的な記述も織り込まれている。例えば「月曜日」は、天上での会議でキリストの受肉が決議されるにいたるまでの議論に始まり、マリアの生い立ち、受胎告知、エリサベトの訪問、ヨセフの苦悩、イエスの誕生、割礼、顕現、マリアの清めの九つの話が、それぞれの場面の登場人物の心理的な揺れや、表情などについての微に入り細をうがった描写を交えて展開する。

細部にわたる描写は、「黙想」(meditation) という宗教的行為の実践を助けるために工夫されたものであった。本来「黙想」とは、ラテン語の聖句を繰り返し唱えながら、その中に強く心を投入し、「読む」という行為を超えた深い理解に至る過程を指す「観想」(contemplation) から発展した方法で<sup>62)</sup>、修道制の伝統に根ざしている。11世紀後半から12

---

60) 田口, 112: 110: ‘do þat he oure lord Jesus ... biddeþ by his ministres, & be buxum to hes vikeres, þat bene in holy chirch þi souereyns, not only dude & wele lyuyng; bot also schrewes & yuel lyuyng’ (annotated as ‘contra lollardos’; Sargent, 24) .

61) ジョン・ウィクリフは聖書至上主義を唱え、聖書に書かれていない事柄の実践の価値を否定し、ローマ教皇庁を批判し、教会の権威を根底から否定、教会での様々な儀式や典礼も否定した。特に聖体の全質変化説(カトリックの正統的教義では、聖餐で用いられるパンとぶどう酒は聖体拝領によって、(外観は変わらなくとも) 実質はキリストの肉と血に変わると説明されている) に対する攻撃は、最も異端的であるとみなされた。

62) See Sargent, *Mirror*, ix f.



世紀にかけて修道制が再び花開いたのに伴い、「黙想」による祈りの方法が脚光を浴び、次第に一般信徒の教化の手段としても推奨されるようになったのだが、中でも、キリストの生涯をつぶさに想像することにより高い靈性に到達しようとした方法は、フランシスコ会によって広められた。クレルボーのベルナルドゥスによって代表されるこの方法は、第一段階として、神との関係を、人としてのキリストを人の感情で愛することに置き換え、両者の関係を花婿と花嫁に喩える（よってこれは、「結婚神秘主義」とも呼ばれる）。この方法は、崇高な知識や靈性よりは、人の生来の感覚を手段とするので、高い教育を受けていない一般信徒の教育に有効であった。

『黙想』は、繰り返し読者を‘devout imagination’を駆使した「黙想」に誘う<sup>63)</sup>。例えば「全思考と全意志を注いで、あたかも肉体の耳で聞き、目で見ているかのように、そして、懸命に、喜んで、倦むことなく、他の全ての仕事や用をしばし捨て置き、忘れて、ここに記された、我らが主イエスの御言葉と御業の場に魂をおかなくてはなりません」<sup>64)</sup>、あるいは「さあ、集中して、靈的なことを、実体のあるもののよう想像しなさい。あなたが、その尊い主の御前に実際にいるのだと想像しなさい」<sup>65)</sup>といった具合である。

さらにラヴは、これに加筆して、その根拠として教父の言葉等を引きながら、そうした方法によって、「肉体や実体を持ったものしか想像することができない純朴な魂も、各々が感じることができる何かを理解することができ、敬虔な心を育み呼び起こすことができる」と記している<sup>66)</sup>。しかも、書かれていることは「聖書で証明できない場合もあり、[中略]根拠がないこともあり [中略] かもしれないとのみ理解されるべきです」<sup>67)</sup>、また、神につい

63) See especially Richard Beadle, “‘Devoute ymaginacioun’ and the Dramatic Sense in Love’s *Mirror* and the N-Town Plays,” in Oguro, et al, *Proceedings*, 1-17.

64) 田口, 112:99: ‘þou most with all þi þought & alle þin entent, in þat manere make þe in þi soule present to þoo þinges þat bene here writen seyð or done of oure lord Jesu, & þat bisily, likyngly & abydyngly, as þei þou herdest hem with þi bodily eres, or sey þaim with þin eyen don; puttyng away for þe tyme, & leuyng alle oþer occupacions & bisynesses.’ (‘Bonaventure incipit’ ; Sargent, 12-13) .

65) 田口, 112:107: ‘Now take hede, & ymagine of gostly þinge as it // were bodily, & þenk in þi herte as þou were present in þe si 3t of þat blessed lord . . .’ (Sargent, 21)

66) 田口, 112:97: ‘so þat a symple soule þat kan not þenke bot bodyes or bodily þinges mowe haue somewhat accordyng vnto is affeccion where wiþ he maye fede & stire his deuocion . . .’ (Sargent, 10) .

67) 田口, 112:97: ‘And so what tyme or in what place in þis boke is writen þat þus dide or þus spake oure lorde Jesus or oþer þat bene spoken of, & it mowe not be preuet by holi writ or grondet in expresse seyinges of holy doctours; it sal be taken none oþerwyys þan as a deuoute meditacion, þat it mi 3t be so spoken or done.’ (annotated ‘Nota bene’; Sargent, 11).

ての理解は人智を超えたことがらなので、『鏡』の中の話は、「比喻として、一種のたとえ話、[中略] 敬虔な想像としてのみ解釈されるべき」で<sup>68)</sup>、三位一体の説明に際しては、「肉体的感覚では感じるができない霊的な存在について聞いたり考えたりする時には、決して[中略] 深く詮索しないように。[中略] 信仰において、あなたの生来の理性を超えたことを聞いた時は、教会が教えるとおりに真実だと固く信じ、それ以上は詮索しないように」と但し書きが添えられている<sup>69)</sup>。

要は、理屈を抜きにしてキリストの生涯のいろいろな出来事に参加し、情的に、キリストの、そしてマリアの心と一体化し、肉体的にも、感覚、特に痛みを共有することである。そして、そのために、『黙想』、『鏡』では、詳細に渡る説明的な描写によって、あたかも劇でも見ているかのような<sup>70)</sup>、独特の世界が繰り広げられる。

例えば受胎告知の場面では、マリアが同意の返答をするのを待つ神が、マリアの「恥じ入った表情、真剣な様子、懸命な言葉を好ましくしっかりと見守[って]」いる。同様に、大天使ガブリエルもマリアの前に立ち、「身を傾けて、穏やかな表情で」、返事をじっと待っており、一方マリアは、「恐れと謙譲の心から真剣な面持ちで立ちすくんで」いる。さらに、マリアの心を去来する思いも丁寧に書き込まれている<sup>71)</sup>。「月曜日：第七章」幼子イエスの

68) 田口, 112:104: 'þe which processe sal be taken as in liknes & onlich as a manere of parable & deuoute ymaginacion. . . ' (Sargent, 18) .

69) 田口, 112:117: 'What tyme þou herest or þenkest of þe trinyte or of þe godhede of gostly creatours as angeles soules þe wech þou maist not se in hire propre kynde with þi bodily eye, nor fele with þi bodily witte; study not to fer in þat matere . . . when þou herest any sich þinge in byleue þat passeþ þi kyndly reson, trowe soþfastly þat it is soþ as holy chirch techþ & go no ferþer.' (Sargent, 22).

70) 実際『鏡』は、中世聖史サイクル演劇と複数のエピソードを共有しているし、直接の影響も与えた。N-Town Play の『マリア劇』の作者は、ラヴの『鏡』に慣れ親しんでいただけでなく、『マリア劇』編集の作業時に、ラテン語・英語の参考文献の他に『鏡』の写本が手元にあったことが指摘されている。A.J. Fletcher, 'The N-Town Play', in R. Beadle, ed, *The Cambridge Companion to Medieval English Theatre*, 163-88, mentioned in Beadle, 'Devoute ymaginacioun', 1. The readers are also directed to Meredith (1987), 14-15, and Spector (1991), xlv-xlv. Takami Matsuda also refers to possible influences of medieval devotional literature such as St Brigitta's *Revelations*, *Meditationes* and *Mirror*. 松田隆美, 『演劇事典』 377.

71) 田口, 112:111: 'Now take here gude hede & haue in mynde, how first al þe holy trinyte is þere abydyng a finale answe & assent//of his blessed douhtere Marie takyng hede & beholdyng likyngly hire shamefast sembland hir sad maneres & hir wise wordes... and also how þe angele Gabriel standyng wiþ reuerence before his lady enclynande & with mylede semblande abideþ þe answe of his message. And on þat oþer side take hed how marie stant saddely with drede & meknes in grete auysment hauyng no pride nor veyn glorie for

割礼の祭の描写も興味深い。割礼の痛みに「激しく泣く」幼子イエスは、「母の膝に抱かれ[中略] 母が泣くのを、泣かないでというように、その小さな手を母の頬に伸ばします。母はこれに心を動かされて、愛しい息子の痛みと涙に心を痛め、口付けしながら、話しかけながら、何とかあやそうとします。[中略] そうして、母が共に泣いたために、御子はぐずぐず泣くことをおやめになりました。そこで母は、幼子の顔を拭き、口付けして、乳をふくませ、できる限りに慰めました。そうして、御子が泣くたびに繰り返したのです。』<sup>72)</sup> これを聞く者は、身近な母子の姿を重ね合わせて、人としての聖母子に寄り添うことができたのである。

ラヴは『鏡』で、原著『黙想』に用いられたこの「黙想」という方法を、更に推し進めた形で信徒に提供し、その大衆性によって成功を収めた。そしてその成功が、今度は、本来修道僧のための信仰形態のひとつであった、キリストの受難を「黙想」「観想」という方法を広く一般信徒に浸透させることに大きな役割を果たしたことになる。こうして、「黙想」(meditation)、あるいは‘devout imagination’とのあい切り離せない関係のもとで、『鏡』またその原著である『黙想』が、中世の心性の本質に大きな影響を与えたこと、さらに、その後も長く影響を与え続けたということは、疑う余地がない。

---

↗ all þe hye praisyng before seide. . . .’ (Sargent, 25).

72) 田口, 113:210: ‘þan mowe we ymagine & þenk how þat litel babe in his modere barme seyng hir wepe, put his litel hande to hire face. als he wold not þat she shold wepe, & she a 3eynward inwardly stired & hauyng compassion of þe sorowe & þe wepyng of hir dere son, with kysyng & spekyng, comforted him as she mi3t, . . . & so þorh þe compassion of þe modere, þe child sesed of sobbyng & wepyng. And þan his modere wipyng his face, // & kyssyng him & puttyng þe pappe in his mouþe; confortd him in alle þe maneres þat she mi3t, & so she dede als oft os he wept.’ (Sargent, 41).